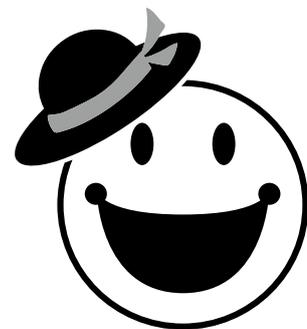


「全少」を日本一研究する指導者による提案

ZENSHOに

挑戦しよう！



養正館館長・渡辺貴斗 第12回

やる気を出す（その9）

子どもは大人の言った通りに染まる

◆どの子にも可能性がある

7年程前のことです。小学校低学年の間、組手が好きにも関わらず試合で成績が出ず、全国大会に出る程でもないごく普通の男の子がいました。あるとき、父親の転勤で東京に家族で引っ越すことになりましたので、組手で有名な道場を紹介しました。

2年後のある日、電話が鳴ったので出てみると、その生徒のお母さんからです。興奮して震える声で、「先生、今、都大会で準優勝しました。」

私は、驚きと嬉しさで一杯になりました。しかし、電話を切ったあと、「こんなに伸びる子だったんだ」と自分の無力さに怒りが込み上げてきました。「この子はトップレベルの選手にはなれないだろう」と、どこかで決めつけていた自分に気づき、「悪い事をした」と後悔しました。私は初めから「そこまでの選手ではない」と諦めていたのに対して、移籍後の道場長は、きちんと彼の才能を引き出したのです。

この件があってから、「この子は才能がありそう」、「この子は選手には無理だな」という目で子どもたちを見るのをやめました。それまでは、才能がありそうな子を選んで強化練習に呼んだりしていました。が、どの子にも可能性があることに気付いてから、根気よく成長を待つ方法に変えました。低学年ですぐに芽が出る子もいれば、高学年になってから芽が出る子もいます。以前はすぐに結果が出なくてイライラして教えていましたが、今は「みんな可能性がある」と思うと心に余裕ができ、稽古中に冗談を言ったり楽しく稽古ができるようになりました。

◆人は期待されたとおりに成果を出す

1964年、心理学者ロバート・ローゼンタールが、アメリカの小学校で以下のような実験を行いました。まず、「未来の優秀な児童」を割り出す特殊なテストを子どもたちに受けさせ、この結果から、「これから確実に成績が伸びてくる子どもの名簿」を担当だけに伝えました。実際は、「特殊なテスト」とはごく普通のテストで、しかも名簿は無作為に選ばれた子どもたちでした。しかし、数ヵ月後、名簿に載っていた子どもたちは明らかに成績が向上していたのです。これは、名簿に載っていた子どもたちに対し担当が「こんなはずはない、この子は優秀だからできるはず」と根気よく指導し、また子どもたちもその期待に応えようと結果を出したものと考えられます。

このように、「人は期待されたとおりに成果を出す」という現象をピグマリオン効果といいます。子どもたちは自分に掛けられた期待に応えてやる気を出したり、「お前はどうぞダメだろう」と担任に初めから諦められやる気を失っていたのです。「この子は才能があります」と紹介されると、ついその子ばかりに指導が集中してしまいがちですが、本当は他の子だって同じように力を入れて指導すれば、同じように結果を出していく可能性が十分にあるのです。

◆人格を肯定すると前向きになる

最近のコンビニのトイレには「いつもキレイに使っていただき、ありがとうございます」という張り紙があります。「あなたはいつもキレイに使う人」

ということが前提として書かれているわけです。利用者は期待に応え、「善人と思われているから、本当に善人らしく振舞おう」と思います。

昔は、「汚すな!」「外にこぼすな!」などと、利用者は汚すものだ」という前提で、命令口調で張り紙が書いてありました。「あなたはきれいに使えない汚す人、できない人」というメッセージが受け取れます。「汚す前からなぜそこまで言われなければならないんだ」と不愉快になります。張り紙制作者の意図に反し、昔はどここのトイレも汚かったように思います。

◆ 人格を肯定して接する

子どもも同じで、「あなたは必ず宿題をやってくるね」と言われれば、「よーし、次も必ずやっとうこう!」と期待に応えようとします。逆に「今日は宿題やってきたんだ。めずらしいこともあるな」などと言われれば、「やってこないダメなやつ、と思われているんだ」と考えてしまいます。子どもは大人が言った通りに染まっていきます。

宿題をやってこなかった子に対して、「いつも宿

題やってこないね」と声掛けしていると、「その通り、僕はいつも宿題やらない人、そういう人」と自分で決めつけ、「僕は自分のキャラを守るためにも、宿題してはいけない」とまで考えてしまいます。

「宿題を忘れたみたいだけど、昨日何かあったの?」と声を掛ければ、「宿題をやってくる能力のある君が、何が邪魔をしてできなかったのかな?」という意味が変わります。「できない人」「ダメな人」のように人格自体を否定するのではなく、「できる人なのに、外的要因が邪魔をしてできなかったんだね」と人格を肯定して接してあげれば、子どもは前向きに変わっていきけるのです。

PROFILE

■渡辺貴斗 TAKATO WATANABE

1968年4月20日生まれ。7歳から父である館長から厳しく空手の手ほどきを受ける。先代が病気となったことから一大決心をして、養正館を継ぐ。児童心理学や成功哲学を研究して子どもたちの「心をつくる」指導法に切り替え、2014年、2015年と2年連続で全少7名入賞させる。道場経営でも、一道場で300名を超える大躍進。

日本空手道鴻志会空手道場養正館 / 静岡県沼津市本町 11-12



Column

「心のコップカード(その2)」 各論1・靴並べ

「靴並べ」のキーワードは、①「どこへ行っても」、②「そこにある靴すべて」です。玄関にある家族の履物、幼稚園のクラスの上履き、学校のトイレのサンダル、病院の患者さんの靴、待合室のスリッパなど、24時間で出会ったすべての靴を揃えきったら、コップの色塗りは満タンです。靴並べができるようになると、手を拭いたタオルをきちんと広げて掛け直したり、読んだ本を棚に戻したり、服をハンガーに掛けたりし、きちんとすること、片づけること、しまうことに繋がっていきます。子供たちの変化にママたちが驚き、カード裏の通信欄に喜びの声をたくさん書き込んでくれます。

【ママたちの声】

◆町内のお祭りで大勢の人が集まる中、虎太郎が靴並べを黙々と始めたことにとっても驚きました。(年中／杉山虎太郎君)

◆道場で毎回聴く「心の話」が本人の心にも響き始めたのか、何も言わなくても今では完璧にそろえています。もうじき一ヶ月、カードにあるコップの数もあと少しになったのを

見て、自分でも毎日やりきった達成感が目に見えるので、「もう少しで全部終わる!」と嬉しそうに残りのコップに色塗りしていました。先日、温泉へ行った時に脱衣場のカゴを拓士がそろえているのを主人が発見! 本人は当然の事のようにやっていた様です。(年少／藤原拓士君)

◆体験入門初日以来、彼の人生に何やら目標ができたかの様に、イキイキとしています。今まで靴ならば、夜、私が帰って来たとき、ごっちゃ〜となった靴をため息をつきながら揃えて玄関を上げる、というのがパターンでしたが、今は全く違います。「ただいまー!」とドアを開ける→キレイな玄関! →絆が奥から「おかえりー!」と犬の様にとんでくる→即、靴を整える…その度ちょっと感動。そんな毎日です。(小1／堀江絆君)

◆先日、幼稚園に迎えに行ったところ、クラスの子の上履きを全てきれいに並べていました。本人は「やりきった!」と満面の笑顔。「今日はゆり組(となりのクラス)のもキレイにしたよ!」と自慢気に報告してくれました。(年長／後藤伊織君)

◆靴並べが当たりまえのようにできるようになってきました。慶貴だけでなく、家族全員の意識も変わり、父親も帰宅後に靴をそろえるようになりました。(小2／菊池慶貴君)

◆病院の待合室や、お友達の家でもくつ並べして周囲から驚かされていました。(小3／増田拓真君)